

## 「祝福の源となるように」

創世記 第12章 1節～9節

説教 本庄侑子伝道師

かつて未来が閉ざされ、人生を諦めるしかなかった1人の人に神の言葉が臨みました。「あなたは生まれ故郷／父の家を離れて／わたしが示す地に行きなさい。わたしはあなたを大いなる国民にし／あなたを祝福し、あなたの名を高める／祝福の源となるように。」(創世記 第12章 1～2節)

その言葉は、年老いたアブラムに臨みました。アブラムは、妻サライに子どもができないという危機を迎えていました。これまで努力しながら、子どもが与えられる日を待ちわびてきたことでしょう。しかし、年老いた今は諦めるしかありません。過去を反省したところで未来を変えることもできません。「サライは不妊の女で、子どもができなかった。」(11章30節)この一文は、アブラム一家の未来を冷酷に閉ざします。

聖書は、私たちの一生は「呪い」のようだと伝えます。それは、アダムとエバが「善悪の知識の木」から実を取って食べた時から始まります。(創世記 第3章)神の言葉を聞かず、自分の思い通りに生きる人間の一生は、呪われた土の上で苦しみながら働き、土の塵に返るだけ、そんな一生だと言うのです。3章以降も、神の言葉を聞かなくなった人間の悲惨が次々と描かれます。11章前半はバベルの塔の物語。人々が自分たちの名を高めるために団結し、高い高い塔を立てる。しかし、神はその塔を崩し、人々はバラバラに散らされます。そして行き着くのが、アブラム一家を襲った限界と終りなのです。

この世界に神などいない。未来を切り開くのか、閉ざすのかは全て、私たちの手腕にかかっている。世界も日本も私たちも、そのような考えに支配されてきました。自分の名を高めるものを積み上げ、それに依り頼んで生きてきました。しかし私たちは神ではない。コントロールできないことが襲ってくると、積み上げてきたものは脆くも崩れ去り、未来が閉ざされていくさまを見ていることしかできないのです。世界も、私たちの人生も、どこかで、かつてアブラム一家が辿った残酷な局面に行き着きます。

しかし、聖書は11章で終わりませんでした。アブラムに神の言葉が臨み、新しい出来事が始まったからです。神は11章までの世界や生き方から「離れるように」とお命じになり、信仰の旅へとお招きになります。その招きには「祝福」の約束が伴いました。これまでの「呪い」を覆

すようにして、「祝福」の約束が連続していきま

す。アブラム自身が呪いから脱出し、祝福されることだけでも奇跡なのに、それをも超えていく約束、呪いに閉ざされた世界がアブラムによって祝福に入るという驚くべき約束でした。

旅立ったとき、アブラムは75歳でした。自分自身には神の約束が実現するさざしや根拠など、何一つなかったのです。しかし、約束して下さった神の力に信頼して旅立ちました。自分の願いはかなわないかもしれない。しかし、神の願いがかなう人生、自分によって呪いの世界が祝福に入るための人生へと旅立ちました。

旅立ちの直後に出会ったのはカナン人でした。それは、11章までの世界を指し示すような存在です。信仰の旅は、神などいないかのようにして生きる呪いの世界の中を歩み続けます。しかし神は、カナン人を前にとまどい、神の約束を疑うアブラムの前に現れ、語りかけ、信仰の旅を続けさせました。アブラムも、カナン人の現実の中にあって礼拝生活を続けました。

しかしこの後、危機が迫ったとき、アブラムは再び自分の知恵を使って身の安全を図ろうとします。神が始めて下さった12章からの人生を、自分の手で11章へと引き戻そうとする私たちの罪の姿が重なります。その究極の姿は、後に神の独り子イエス・キリストを十字架につけるという仕方で、歴史の中に跡を残しました。

主イエスが墓に収められた時、もう全てが終わってしまったと誰もが思いました。しかし終わってはいませんでした。神が終わらせませんでした。主イエスは墓から引き出され、死を打ち破って復活なさいました。私たちの過ちも裏切りも、神の独り子を殺すという最大の罪でさえも、神の計画を挫折させることはできなかったのです。

夜中を過ぎ、闇が深まれば深まる程に夜明けは近づきます。世界も、私たちの人生も、絶望の闇夜がある一方で、イエス・キリストが再び来てくださる夜明け、2日目の夜を打ち破って現れ出る復活の朝をこそ待ち望んでいます。復活のキリストは、今も私たちの前に立ちはだかって語りかけてくださいます。あなたは終わっていない。12章の続きを生き続けなさい。私があなたを祝福の源とするのだからと。

(記 本庄侑子)